群馬大学社会情報学部研究論集　第12巻　35—53頁　2005

ジェイムズ・ジョイスの「土」

南　谷　覺　正
外国文化第一研究室

A Reading of "Clay" by James Joyce

Akimasa MINAMITANI
World Civilizations

Abstract

This essay is a close interpretation of "Clay," the tenth story in James Joyce's *Dubliners*. With special focus on an analysis at a number of levels of the protagonist Maria, it attempts to provide the reader with deeper insights for appreciation of the work from the viewpoint of "epiphany."

「土」は、『ダブリンの人々』9番目の作品で、1905年には完成稿となっていたとされる。「成熟期」の4作品——「小さな雲」「対応」「土」「痛ましい事件」——の中で、「小さな雲」と「対応」が登場人物の設定や場面構成にかなりのcorrespondenceを持っていたように、「土」と「痛ましい事件」も、「痛ましい事件」の主人公が男性で結婚生活から自分を意識的に隔てようとするのに対し、「土」の主人公は女性で結婚したくてもできないような状況にあるという対比はあるが、両者とも結婚しないまま生を終えるよう宿命づけられているという点で親縁性を有し、いずれ劣らぬ深いペーソスを湛えた作品になっている。

*　*　*　*　*　*　*　*　*

寮母からお茶が終わったらすぐに外出してもいいという許可をもらっていて、マライアは今晩の外出を楽しみにしていた。台所はピカピカで、料理係は、大きな銅のボイラーは鏡みたいに顔が映ると言った。暖炉の火は赤々と燃え、サイドテーブルの1つには4つの大きなバームブラックが載っている。バームブラックは切れ目がないように見えるが、近づいてよく見ると、長く厚い同じ大きさに切られていて、お茶の時にすぐ配られるように準備されている。それはマライア自身が切り分けたのだ。

マライアはとてもとても背が低かったが、とても長い鼻と、とても長いあごを持っていた。ちょっと鼻にかかった声で、そうですねとか、そうじゃないんですよと、いつもなだめるような口調で言った。女たちが桶で洗い物をしながら口論になると、いつもマライアが呼びにやられ、そしていつも仲直りさせた。ある日、寮母がマライアに言った。

――マライア、あんたはほんとに平和の使者だよ！

副寮母それに管理委員会の婦人のうち2人がこの賞賛の言葉を聞いていた。ジンジャー・ムーニーも、火のしの係をしているだんまりのことを、マライアがいなきゃ、あいつに何してるかわかったもんじゃないよといつも言っている。誰もがマライアを好いていた。

女たちのお茶は6時に始まる、とすると、7時には出かけられるだろう。ボールスブリッジからピラーまで20分、ピラーからドラムコンドラまで20分、買い物に20分。とすると8時には向こうに着けるだろう。彼女は銀の留め金がついた財布を取り出し、*A Present from Belfast*（ベルファスト土産）という言葉をまた読んだ。彼女はその財布がとても好きだった。というのは、それはジョーが5年前にアルフィーといっしょに聖霊降誕祭の翌日の休日にベルファストへ行ったとき、買ってきてくれたものだから。財布の中には、半クラウン銀貨が2枚、それとペニー銅貨が何枚か入っている。電車賃を払っても、5シリングはまるまる残るだろう。どんなにすてきな晩になることだろう！子供たちみんな、歌を歌って。ただジョーが酔って帰らなければいいのだけれど。ジョーは少しでもお酒が入ると同じ人とは思えなくなってしまう。

ジョーはよく彼女に、彼の家でいっしょに暮らさないかと言った。でもそんなことをしていたら、自分が邪魔になっていると感じただろう(ジョーの妻は、とても彼女にやさしくしてくれるけれど)、それに彼女はもうこの洗濯屋の生活に慣れてしまっていた。ジョーはいい人だ。彼女はジョー、それにアルフィーの乳母をしたのだった。ジョーはよく言っていた――

――ママはママだけど、マライアが本当のお母さんさ――

一家が分散することになったとき、ジョーとアルフィーが、ここ《灯火の下のダブリン》という洗濯屋に職を見つけてくれたのだ。マライアはこの職場が好きだった。その前はプロテスタントについてとてもひどく考えていたのだが、今ではとてもいい人たちだと思っている。ちょっともの静かで生真面目だけれど、いっしょに住むにはとてもいい人たちだ。それにここには温室があって、植物を育てられる。彼女は植物の世話をするのが好きだった。きれいな羊歯や桜蘭(ワックスプラント)[1]があって、誰か訪ねてくる人があると、いつも温室から1、2枝取ってきてあげるのだった。1つだけ彼女が好きでないものといったら、壁に貼られている宗教ビラだった。でも寮母はとてもいい人でやりやすいし、とても品のいい人だ。

料理係が準備がすっかりできたと言ってきたので、マライアは食堂に行って紐を引き大きな鐘を鳴らした。2、3分すると、女たちが、2人、3人と連れ立って、湯気の立つ手を外履きのスカートで拭ったり、シャツの袖を湯気を立てているまっ赤な腕の上にまくりおろしながら部屋に入ってきた。そしてめいめい、テーブルの、とても大きなマグカップの置いてある前に坐ると、料理係とだんまりが、とても大きなブリキ罐から、砂糖とミルクが前もって混ぜてあるお茶を注いで回った。マライアはバームブラックの分配の監督役で、みんながちゃんと4切れずつ取るように見ていた。みんなが食べ始めると、冗談や笑い声でにぎやかになっ

た。リジー・フレミングは、きっとマライアが指輪を当てるよと言った。毎年ハロウ・イヴのたびにフレミングは同じことを言うのだが、マライアは笑って、指輪も男の人も、別に望んでいるわけではないから、と言わずにいられなかった。そして彼女が笑うと、その灰緑色の目は、失望の色を浮かべた含羞(はにかみ)で輝き、鼻の先が顎の先にもう少しでくっつきそうになった。それからジンジャー・ムーニーがお茶の入ったマグを持ち上げ、マライアの健康を祈って乾杯の音頭をとり、他の女たちはみんなそれに和してテーブルをマグでカタカタ打ち鳴らした。ジンジャー・ムーニーは、これでお茶をわるポートワインがありゃ言うこたぁないんだがねぇと言った。マライアは再び笑い、鼻の先が顎の先にもう少しでくっつきそうになり、彼女の小さな身体はバラバラになりそうなほど打ち震えた。というのも、ジンジャー・ムーニーは善意で言っているのがわかったからだ。もちろん、ジンジャー・ムーニーには、品のない女の考えをするときがあるけれども。

しかし、女たちがお茶を終え、料理係とだんまりが食器を片づけ始めたとき、マライアは喜ばなかったことか！彼女は自分の小さな寝室に行き、明日の朝ミサがあることを思い出して、目覚まし時計の針を7時から6時に戻した。それから仕事着のスカートとブーツを脱ぎ、一番いいスカートをベッドの上に広げ、彼女の小さいドレス・ブーツをベッドの足下に置いた。彼女はブラウスも着替え、鏡の前に立ちながら、若い娘だったころ日曜日の朝にはいい服を着たことを思った。それから、これまで何度も何度も着飾ってきた小さな身体を奇妙ないとおしさをもって見つめた。経てきた長い年月にもかかわらず、こぎれいな小さな身体だと思った。

彼女が外に出たとき、通りは雨で光っていた。マライアは、彼女の古い茶色の雨外套を嬉しく思った。電車は満員で、彼女は端に置いてある小さな補助椅子に、乗客たちのほうに向かってつま先が床につくかつかないかで坐らなければならなかった。彼女は心の中で、これからしようとしていることを整理した。そして、自由の身で、自由になるお金を持っているのはどんなにかいいものだと考えた。(2) そしてそれから、今晩がすてきな晩になればいいがと願った。きっとすてきな晩になるだろう、でも、アルフィーとジョーがこのところまったく口をきかなくなっているというのはとても残念だ。彼らはいつも喧嘩ばかりしている。でも2人とも子供の時はとても仲が良かったのだ。だけどそれが人生というものだろう。

彼女はピラーで電車を降り、群衆の間を白イタチのように素早くぬって歩いた。そしてダウンズのケーキショップに入ったが、店は満員で、随分待ってやっと店員に応対してもらうことができた。彼女はいろいろな種類の混ざったペニー・ケーキを12個買い、大きな紙袋を抱えてやっと店から出てきた。それから彼女は他に何を買おうかと思案した。何か本当にすてきなものを買いたかった。向こうでは、胡桃や林檎はきっとたくさんあるだろう。何を買ったらいいか決めるのがとても難しく、彼女が考えつくことができたのはケーキだけだった。彼女はプラムケーキを買うことに決めた。しかしダウンズのプラムケーキはアーモンドのアイシングが多くない。そこで彼女は、ヘンリー・ストリートのケーキショップに行った。そこでは、どれにするかなかなか決めかね、長い間思いあぐねていると、カウンターの向こうにいた今風な若い女店員が、明らかにマライアに少し苛立ったふうで、結婚式のケーキでもお探しなの？と聞いた。マライアは顔を赤らめ、彼女のほうを向いて微笑んだ。しかしその若い女店員は、それを肯定の返事として受け取り、プラムケーキのぶ厚いかたまりを切り取って紙にくるくるとくるんで言った。

――2シリング4ペンスになります――

彼女はドラムコンドラ行きの電車では立ち通しになるだろうと思った。若者は1人として彼女に気がつかない。でも1人の初老の紳士が席をつめて彼女が座れるところを作ってくれた。彼はがっしりした体格の紳士で、茶色の硬い帽子をかぶり、角ばった顔に灰色がかった口髭を生やしていた。マライアは、彼が陸軍大佐のようだと思い、ただまっすぐ前を見ているだけの若者たちよりどれだけ礼儀のある人だろうと思った。その紳士は、ハロウ・イヴとあいにくの天気について話しはじめ、袋の中はさぞ小さな子供さんたちのためのもので一杯なんでしょうなと言い、若い者は若いうちに大いに楽しむのがいいですな、と言った。マライアは彼に同意し、しとやかなうなずきとせき払いで報礼した。彼は彼女にとてもやさしくしてくれた。彼女がカナル・ブリッジの停留所で降りようとして彼に礼を言ってお辞儀すると、彼はお辞儀を返し帽子を持ち上げ、気持ちのいい笑顔で見送ってくれた。彼女は雨の中、その小さな頭をうつむかせ高台の道を上りながら、紳士はたとえ1杯機嫌のときでも紳士らしいものだと考えた。

彼女がジョーの家に着いたとき、あ、マライアだ！と、みんなが言った。ジョーは仕事から帰ってきており、子供たちはみんなきちんとした服を着ていた。隣の家から2人の大きな少女が来ていて、みんなでゲームをしていた。マライアはケーキの入った紙袋を長男のアルフィーに渡してみんなで分けるようにと言った。ドネリー夫人は、こんなに大きな袋のケーキをいただくなんてと言い、子供たちに

――ありがとう、マライア――

と言わせた。

しかしマライアは、パパとママには特別にすてきなものを持ってきた、きっと気に入ってもらえると思うと言って、プラムケーキを探し始めた。彼女はダウンズの袋の中を探し、雨外套のポケットを探し、そして玄関の帽子掛けのところも探したが、どこにも見つけられなかった。それで彼女は子供たちみんなに、誰かケーキを――もちろん、間違ってのことだけれど――食べてしまわなかったかと聞いた。しかし子供たちはみんな食べてないと言い、盗んだと疑われるくらいならケーキなんか食べたくないというような表情をした。みんな口々にこの謎の答えを出した。ドネリー夫人は、マライアはきっと電車に置き忘れてきたのだと言った。マライアは、灰色がかった口髭の紳士が彼女をどんなにまごつかせたかを思い出し、恥ずかしさと苛立ちと落胆で顔が赤くなった。せっかくびっくりさせようと思って買った彼女の小さなプレゼントがみじめな失敗に終わってしまったことと、2シリング4ペンスをまるで無駄に捨ててしまったという思いで、彼女はその場で泣きだてしまいそうになった。

でもジョーは、気にしないでいいからと言って、彼女を火の側に坐らせた。彼は彼女にとてもやさしくしてくれた。彼は、職場で起こっていることをいろいろ話し、彼が社長に向かって言った気の利いた返答を彼女のために繰り返して言った。マライアにはジョーがなぜその返答にそんなに笑うのかわからなかったが、その社長さんはきっといばりちらすような、やりにくい人なんでしょうと言った。ジョーは、扱いを心得ればそんなにひどいわけでもないと言い、神経を逆なでするようなことさえしなければ、まずまずの男だと言った。ドネリー夫人は子供たちのためにピアノを弾き、子供たちは踊って歌った。それから隣りの2人の少女が胡桃を配って回った。ところが誰も胡桃割りを見つけることができなかった。ジョーはそれについてほと

んど不機嫌になり、胡桃割りなしでどうやってマライアが胡桃を割れるんだと言った。しかしマライアは自分は胡桃が好きではないし気を遣わないでいいからと言った。そこでジョーはスタウト（黒ビール）を飲まないかと聞き、ドネリー夫人は、もしポートワインのほうがよければ家においてあると口を添えた。マライアは、とくに何も飲みたいわけではないのでどうか気にしないでほしいと言った。しかしジョーは引き下がらず言い張った。

そこでマライアはジョーの望むようにさせ、彼らは暖炉のそばに坐って昔のことを話した。マライアはアルフィーのことで何かとりなしができればいいがと思った。しかしジョーは、あいつに口などきくものか、そんなことをするくらいならくたばったほうがましだ！と言い、マライアはアルフィーの話しを持ち出したことを謝った。ドネリー夫人はジョーに、血肉を分けた兄弟のことをそんなに言うなんてみっともないと言ったが、ジョーは、アルフィーは兄弟なんかじゃないと言い、そのことでもう少しで口論になりそうだった。しかしジョーは、今晩はハロウ・イヴだから癇癪を起すのはやめようと言って、ドネリー夫人にスタウトをもう何本か開けてくれるよう頼んだ。隣りの２人の少女はハロウ・イヴのゲームを幾つか準備してきていて、やがてすべてが再び陽気になった。マライアは子供たちがこんなにも陽気で、ジョーとその妻がこんなにも上機嫌でいるのを見て嬉しかった。隣りの２人の少女は、テーブルの上に幾つか皿を置き、そこに子供たちを目隠しして連れていった。１人は祈禱書をつかみ、３人は水であった。そして隣りの少女の１人が指輪の皿を選んだとき、ドネリー夫人は、あ、わたしは全部分かってるのよ！とでも言わんばかりに、顔を赤らめている少女に向かって人さし指を左右に振ってみせた。(3) 子供たちは、今度はマライアを目隠ししてテーブルの所に連れていき、マライアが何を取るか見てみようと言い張った。マライアは、子供たちに目隠しされている間じゅう、笑って笑って、鼻の先が顎の先にもう少しでくっつきそうになった。

子供たちは、マライアを、笑いと冗談のさざめく中、テーブルのところまで連れていった。そして彼女は命じられるままに手を空中に伸ばし、手をあちらこちらと宙で動かし、それから皿の１つに下ろした。何か柔らかな湿ったものが指に感じられた。マライアは、誰も何も言わず、目隠しを外そうとしないのに驚いた。数秒間の沈黙があり、それから小走りに走り回る音とひそひそ声があちこちでした。誰かが庭について何か言っていた。そして最後にドネリー夫人が隣りの娘の１人に何かとても不機嫌なことを言い、すぐにそれを捨てるよう命じた。今のはゲームではない。マライアは何か間違いがあったことを了解し、もう１度それを行なわなければならなかった。そして今度は祈禱書を取った。

その後でドネリー夫人は、ミス・マクロードのリールを子供たちに弾き、ジョーはマライアにワインを飲ませた。やがてみんなは再び陽気になり、ドネリー夫人は、マライアは祈禱書を取ったのだから今年のうちに修道院に入るのだわと言った。マライアはこの晩ほどジョーが彼女にやさしくしてくれたことはないと思った。楽しい話しや思い出話をいっぱいしてくれた。彼女は、みんなとても親切にしてくださって、と感謝した。

とうとう子供たちは疲れて眠たくなり、ジョーはマライアに、帰る前に短い歌を、昔の歌の１つを歌ってくれないかと頼んだ。ドネリー夫人は、マライア、ぜひそうして！と言った。そこでマライアは立ってピアノの脇に立たねばならなかった。ドネリー夫人は、子供たちに、静かにしてマライアの歌を聞くよう命じた。

それから彼女は前奏曲を弾き、歌い始めの所で、マライア、はい！と言った。マライアは、顔をとても赤くしながら小さな震え声で歌った。彼女は《私は夢見た》を歌い、歌が2番に来たとき再び1番を歌った。

I dreamt that I dwelt in marble halls	私は夢見た、大理石のお館に
With vassals and serfs at my side	家臣や奴婢にかしずかれ住んでいる夢
And of all who assembled within those walls	私はお館に住んでいるみんなの
That I was the hope and the pride.	希望であり誇りだった
I had riches too great to count, could boast	私は計りきれないほどの富を持ち
Of a high ancestral name,	私の身体には高貴の血が流れていた
But I also dreamt, which pleased me most,	でも私はもう1つ夢を見た、それが一番嬉しい夢だった
That you lov'd me still the same.	それはあなたがまだ愛してくれているという夢

しかし誰も彼女にそのことを指摘しなかった。そしてマライアが歌い終えたとき、ジョーはすっかり心動かされていた。彼は、昔みたいなあんないい時代はないし、他のやつが何と言おうと、バルフの奴さんの曲ほどいい曲はないと言った。ジョーの目は涙でいっぱいになっていて、探しているものを見つけることができなかった。それでとうとう彼の妻に、コルク抜きはどこにあるんだ、と聞かなければならなかった。

* * * * * * * * *

「土」は、Hallow Eve と呼ばれる、万聖節（All Saints' Day）の前日の午後5時すぎからの数時間を、主人公マライアに付き従いながらほぼ連続的にたどっている。（Hallow Eve は、アメリカでは Halloween と呼ばれ、jack-o'-lantern、"trick and treat"、仮装の風習などで日本にもよく知られているが、その源流の1つともいうべきアイルランドにおいては、ジョイスの時代には、作中でも紹介されているように様々な占いを行なう習俗があり、バームブラックという干し葡萄入りケーキに指輪を入れ、誰が指輪の入ったケーキを取るかでその年に結婚する人を占ったり、水、祈禱書、指輪などを入れた皿選びをして将来を占ったりしていた。）最初の舞台になっているのは Dublin by Lamplight という名の洗濯屋で、これは現実に Ballsbridge にあった Church of Ireland（プロテスタント）系の施設で、主に元娼婦の更生施設であった。リジー・フレミングやジンジャー・ムーニーなどの女性たちはその更生の対象者であろう。マライアはそういう施設の住み込みの雑役係のような立場で雇われていると考えられる。

批評の中には、マライアを歯の抜けた老婆としているものがあるが、結婚適齢期を明らかに過ぎた年齢程度に漠然と考えたほうがいいであろう。そうでないと、結婚にあてつけた彼女に対する冗談や皮肉が、冗談や皮肉として機能しなくなるし、彼女が白イタチのように動ける（"She got out of her tram at the Pillar and ferreted her way quickly among the crowds."）のも不自然だ。

マライアの身体的特徴について、初読の際に読み落としやすいと思われることは、彼女の体軀の小ささである。それは、“Maria was a **very, very small** person...”; “her **minute** body nearly shook itself asunder...”; “her **tiny** dress-boots”; “bending her **tiny** head under the rain”; “she looked with quaint affection at the **dimunitive** body...”（太字筆者）というように折りに触れ強調されているが、例えばJonathan Cape版の *Dubliners* の挿し絵のように普通に見かける小柄な婦人ではないであろう。ここで想定されている小ささは、はっとするほどの小ささであって、それは彼女が電車の小さな補助椅子に坐った時に、彼女のつま先が床につくかつかないかであったというところに暗示されている。(“Maria was a **very, very small** person...” と very が2度重ねて使われているのもそうでなければ意味を持たない。)

年齢的にも、身体的にも、容貌的にも、また経済的にも恵まれているわけではないマライアに結婚の可能性は全くないことを察知した読者は、電車の中で、マライアが紳士との会話に胸ときめかす様子を痛々しく感じるであろう。それに、彼女がDublin by Lamplightで誇りに思っているらしい仲裁能力というのも、ジョーの家では惨めな失敗に帰す。おまけに皿占いでは死を意味する土をつかんでしまい、次ぎの祈禱書がお慰みとすれば、マライアはまもなく死んで教会の墓地に葬られるという運命が占われたことになる。そういう彼女が最後に歌う“I Dreamt that I Dwelt”の歌は、彼女の境遇と対照的な夢を歌った歌だけに、一層読者の哀切を誘う——物語は大体そのような流れで、読者をペーソスの深い霧の中にとり残して終わる。

皿占いにおいて奇妙なのは、マライアの指先に触れた「何か柔らかな湿ったもの」が実際に何であったのか、直接には語られてはいないことである。この部分の描写は目隠しをされたマライアの感覚を通してのものになっていて、見ることもできなければ、それが何であるか周りの人が口にした様子もない。ただ周囲の反応や、ドネリー夫人が不機嫌な様子を露にしそれをすぐに捨てるよう命じていることから判断して、何か非常に禍々しく不吉な事態が起こったのだいう印象を読者は持ち、そこでこの作品のタイトル“Clay”に想到して、それが土であったのだと得心するのである。誰かが庭のことを言っていたというのも、誰々が庭で土を取っていたということだと解釈すれば辻褄が合うし、雨の日で土が雨に濡れていれば、“wet”であったことも合点がいく。おそらくジョイスも、土以外のものであったという含みを持たせているとは思われない。

マライアが土に触れた時の描写からは、何とも言えない感触が伝わってくるが、死の感触というのも、われわれはほとんど目隠しをされたも同然でそれに近づき、何も告げられないままいきなり触れるのであるから、その消息を写す上でよくできた結構と言えるのかもしれない。それまでは陽気で、笑い声や冗談が飛び交っていたのが、ひとたび死神が姿を現せば、あたりの空気は一変し、“a great deal of scuffling and whispering”が生じるあたり、誰かが死んだときの人間社会の様態を写しているようでもあり、この場面は、『ダブリンの人々』の中においても最も印象的なepiphanic momentsの1つになっている。“that was no play”という言葉は、表向きは、「今のはゲームとして不成立」ということだが、裏には「今のは遊びではなく真剣な予言」という意味が透けて見えるし、そしてまた

その発話者は、表向きは気まずい場面を取りなそうとしているドネリー夫人の声として受け取ることができるが、見方を変えれば、語り手の口を通して語られる、どこからともなく響いてくる声のようにも聞こえるのである。

この場面に関してもう1つ奇妙なことは、読者にはこれだけ高い確度をもって推理されることが、マライアにはできていないということだ。これについては彼女の身体についてよりも一層 subtle な描き方になっているが、処々に彼女の知性が非常に simple であることが匂わされている。外出前の彼女の数値計算の仕方、店でケーキを買うときの手際の悪さ、ジョーが社長に対して言ったという気の利いた返答のどこが可笑しいのかわからないこと、逆にリジー・フレミングの言った、読者には面白くもない冗談には異常なまでに笑い転げていること、歌を歌う場面でドネリー夫人が "Now Maria!" と、歌の出だしをまるで子供に対するかのように指示していること、子供たちも他の大人には声をかけないのにマライアを皿占いに引っ張り出していること、そしてマライアは、目隠しをされる間じゅうやはり子供のように何度も何度も笑い転げていることなど、その現われである。

言うまでもなく『ダブリンの人々』のどの作品においても、語り手が時に登場人物の意識になりすまして語ることはしばしば行われていることだが、この「土」はそれが最も広範になされていて、いわゆる客観的叙述は限られており、その境目もそれほど明確ではない。寮母やリジー・フレミングのマライアに対する賞賛の言葉も、マライアの意識の中での言葉だと思えば、現実にはマライアをあやしている言葉ともとれる。洗濯中に口論が始まるとマライアがいつも仲裁役に呼ばれるというのだが、本来更生施設である以上、規則は厳格で、口論を止めなければ懲罰対象になりかねないのだから、誰が行っても言うことは聞くはずである。頭ごなしに言うより、マライアのように相手に優越感を抱かせる存在の方が角が立たないだろうという思惑もあるのかもしれない。リジー・フレミングが毎年のように繰り返す、指輪はきっとマライアに当たるよという言葉にも、ジンジャー・ムーニーのマライアの健康を祝しての乾杯にも、やはりどことなくからかいの気味が感じられる。マライアはそれに対し、相変わらず同じ不器用な答えを返し、同じ含羞んだ表情を作り、陳腐な冗談に笑いころげるのだ。

彼女の仕事は、台所関係の作業であるらしく、ボイラー磨きを含む台所の清掃・整頓、暖炉の火の世話、バームブラックを切ることなどが彼女のやった仕事として誇らしく紹介してある。しかしバームブラックを作ったのは料理係であり(そうでなければ、自分が作ったと誇らしげに言うはずである)、彼女はそれを切り分けただけだ。しかし考えてみると、切り分け作業など料理係自身がやればすむことなのだから、何となくマライアにできそうなことだけ仕事を与えることで彼女の自尊心を充たしてやっているようにも見受けられる。食事の準備ができ、鐘を鳴らす作業もわざわざマライアの部屋まで来なくても料理係自身が紐を引っ張った方が簡便かもしれない。女たちが食堂に入ってきて、お茶を給仕するのは料理係と "dummy" であって、マライアはバームブラックを女たちが4切れずつ取るかどうかを見ているだけの役割になっている。"dummy" と呼ばれている女性もそうであろうが、ほんの半端仕事をあてがわれているだけで、むしろ慈善の対象としてここにいるようにさえ見える。マライアは外出するにも寮母の許可を得なければならないのだから、自立した職業婦人というのとはほど

遠い立場にいるとしか思えない。

電車での「紳士」との応対を見てみよう。「紳士」が立って席を譲っていないこと、“a square red face and a greyish moustache” や酒臭い息を考えれば、読者から見て彼はとても紳士の範疇に入れられるような人間ではないにもかかわらず、マライアはその男を紳士と思いなし、子供のように硬くなった応接に終始している。

マライアの意識をなぞった語りの文体が、子供じみたものになっていることも目につく。“She was **always** sent for when the women quarrelled over their tubs and **always** succeeded in making peace.”（太字筆者）の always の 2 度の使用のように、大人であれば控えめな表現にするであろう言葉を連続して使っている。全編では always が 6 回、all が13回も使われ、また強調のための very, so（such）も、very が16回、so が13回（such 4 回）となっている。また文章自体も、and（ないし so）や but による単純な接続、しかも awkward な接続が多い。

こうしたことを考え合わせると、マライアは身体のみならず知的な意味でも、十分に大人として成熟していない、成長段階のどこかで心身の発達が停滞してしまったような女性として想定されているように思われるのである。

さてそうなると読者は、例えば Every one was so fond of Maria. というようなマライアの意識をなぞった文を果たして額面通り受け取っていいかどうか慎重にならざるを得なくなる。ドネリー家を訪れたときにみんなが異口同音に “O, here's Maria!” と言ったとあるが、それは現実としては少々考えにくいことで、子供たちの数人が言ったのをマライアの単純化する傾向のある認識習性が、「みんな」というふうに捉えたのであろう。またそれは、待ちかねたお客が来た嬉しげな歓声として表面上は読めるものの、以下の子供たちのマライアに対する態度を見ると、むしろ逆のようにも読者には響くのである。例えば子供たちのペニーケーキを渡されたときの “Thanks, Maria—” という言葉も、ドネリー夫人に命令されて言っているだけで気乗りのしないものに聞こえるし、最後に彼女が歌を歌うときにも、子供たちはちゃんと聞くよう命じられているからこそ聞いているものの、本来なら下手な歌など聞かずに早くベッドに入りたいと思っている様子が手に取るように伝わってくる。マライアが 1 番の歌詞を繰り返して歌っても誰も間違いを指摘しなかったのも、歌を聞いていなかったからという可能性が高いし、聞いていたとしても、下手に指摘してやり直されるよりなるべく早く終わって欲しいと思っているからだと推理できる。そもそも帰る前に歌を歌ってくれないかと持ちかけること自体、歌を歌ったら帰るということだから、体よくマライアを帰そうとする科白であって、ドネリー夫人の “Do, please, Maria!” という懇請もそれを確実なものにするための後押しになっている。そして何よりも、マライアの皿に土をいれたのが子供たちの誰かの悪戯だとすると、それは彼女に対するかなり強い厭悪感と嫌がらせを顕現させていることにもなるのである。

そうして見ると、何もかもうまくいっているように聞こえる Dublin by Lamplight における生活も、本当にそうなのかどうか覚束なくなる。彼女自身はその場所がとても好きだと言った上で、ただ 1 つ好きでないものとして “the tracts on the walls” を挙げている。（“tracts” というのは、ここはプロ

テスタントの施設なのだから、更生とプロパガンダを目したパンフレットのようなものが壁に掛けてあるのだろう。）それが嫌いだというのは、例えば、“Maria, you are a veritable peace-maker!” といった言葉にもそこはかとなく感得されるプロテスタント的体質——あからさまな押し出しの強さ——がマライアのような因習的で内気で控えめな人間には違和感を感じさせるためだろう。しかしもしそれが嫌いならば、それを生みだしている母体そのものにもはっきり相入れないものを感じるはずなのだ。“tracts” だけが嫌いであるという彼女の述懐は不自然で、彼女は無理にそう思い込もうとしているだけに違いない。現実問題として、カトリックの人間が１人プロテスタント集団の中にいて居心地のいいわけがない。

逆にプロテスタントから見れば、カトリックの迷妄と因循に凝り固まった体質はたまらないはずだが、幸か不幸かマライアは敵視するにも及ばない劣等の相手ということで、軽視からの寛容が示されていると解釈することができる。また収容されている海千山千の女性たちから見れば、「熱き血潮」を知りもせずそのまま朽ち果てていこうとしているマライアは、やはり憐れむべき女として映るのではないだろうか。リジー・フレミングの冗談や、ジンジャー・ムーニーの乾杯の音頭、皆の唱和には、マライアに対する冷やかしに近いものが感じられる。

多くの批評家が指摘しているように、「土」では“nice”という語が多用（11回）されている。これは彼女の認識、言語の simplicity を表していると同時に、彼女の心理機構を窺う上でも興味深い視点を提供してくれる。

1. The fire was **nice** and bright...
2. Often he had wanted her to go and live with them, but she would have felt herself in the way (though Joe's wife was ever so **nice** with her)...
3. What a **nice** evening they would have, all the children singing!
4. She used to have such a bad opinion of Protestants but now she thought they were very nice people, a little quiet and serious but still very **nice** people to live with.
5. There was one thing she didn't like and that was the tracts on the walls, but the matron was such a **nice** person to deal with, so genteel.
6. ... she looked with quaint affection at the diminutive body which she had so often adorned. In spite of its years she found it a **nice** tidy little body.
7. She hoped they would have a **nice** evening.
8. Then she thought what else would she buy: she wanted to buy something really **nice**.
9. He was very **nice** with her and when she was getting out at the Canal Bridge she thanked him and bowed...
10. But Joe said it didn't matter and made her sit down by the fire. He was very **nice** with her.
11. Maria had never seen Joe so **nice** to her as he was that night...（太字筆者）

こうして一覧してみると、マライアが主立った登場人物すべて――ドネリー夫人（2）、Dublin by Lamplight の人々（4）、寮母（5）、電車の中の紳士（9）、ジョー（10、11）――に対して、この形容詞を使用していることが分かる。これは1つには、前述したマライアの知的 simplicity の印象を強める機能があるだろうが、同時に、この広範な適用には、彼女の周囲の人間に対する「善意」が表明されている。多少欠点はあるとしても、総じて人間に対して肯定的な見方をする（しようとする）のが、マライアの基本的姿勢の1つになっているようだ。

想像力を要求される微妙な部分もある。例えば、ジョーとアルフィーが彼女をここへ送り込んだことについて、本文中では、"After the break-up at home the boys had got her that position in the *Dublin by Lamplight* laundry, and she liked it." と言っているものの、プロテスタントに対して持っていたという非常に強い悪印象を考えれば、少なくとも当初は好きであったはずがない。そうであれば、ジョーやアルフィーが、彼らを育てた自分にこのような処遇をすることについて、彼女はおそらく深い悲しみを味わったのではないか。しかし、彼女はそうした気持ちを表には出さず、"nice" という言葉を使う―― "She used to have such a bad opinion of Protestants but now she thought they were very nice people, a little quiet and serious but still very nice people to live with." ―― "nice" は2度も使われているが、それだけ一層何とか周囲を好きだと思い込もうとする「努力」が感じられてくるのである。

彼女は、寮母に褒められたこと、それを副寮母と2人の管理委員が聞いていたことを誇らしそうに追懐している。それは彼女が、こうした管理者サイドの主立った人々の評価を非常に気にしているということでもある。もし彼女たちの不興を買えば、彼女には生きていく上で致命的な障害になるであろう。そうであれば、寮母についていい人だと思い込むことは、彼女にとっても自己保身につながる。今回のように私用の外出をするということは、その分彼女にとって負い目になるわけだから、普段以上に自分の仕事に精を出し、落ち度のないように気をつけたに違いない。冒頭部の台所の整頓の様子は、そんな仔細をも物語っているようだ。

マライアは、"the matron was such a nice person to deal with, so genteel." と寮母を評価しているが、この "deal with" というのが、うっかり出てしまった本音のようにも見える。（ジョーの職場の社長について、彼女は、"she said that the manager must have been a very overbearing person to deal with." と同じ言葉を使っている。）彼女の寮母に対する本当の気持ちは、いやでもとにかくつきあっていかなければならない人物以上ではないのではないか。"genteel" というのも、それしか褒め言葉が見つからないといったような言葉だし、それは上辺だけの「お上品ぶり」を暗示していなくもない。"Maria, you are a veritable peace-maker!" という言葉にも、そんなところがほの見えて、読者は寮母に少し辟易するような感じを持たされるし、土台一筋縄ではいくわけのない強者ぞろいの女性たちを管理、更生させていこうというのだから、心底上品であっては立ち行くわけもない。"nice" は、マライアのそういう寮母に対する煙たい気持ちを被ってくれるヴェールにもなっているのである。

次にドネリー夫人に対して使われるマライアの "nice" を見てみよう。ドネリー夫人は、マライアと

はおよそ対照的に、機を見るに敏で如才なく振る舞うことができる。マライアが子供たちにペニー・ケーキの入った袋を渡すと、てきぱきとお礼を言い、子供たちにお礼を言うよう命じ、マライアがプラムケーキを見つけられないと、電車の中に忘れたのが明らかだとして紛糾にけりをつけ、マライアが落胆しジョーがなぐさめているときに、ピアノを弾き子供たちに歌わせ踊らせて雰囲気を変えようとし、ジョーがマライアに黒ビールを勧めると、ポートワインもあると口を添え、マライアがアルフィーのことを持ち出してジョーが激昂すると、自分の兄弟をあしざまに言うことをたしなめ、子供たちが皿占いを行ない隣りの少女の１人が指輪を選び当てると、少女に指を振って見せ貫録を示し、マライアが皿占いを行ない気まずい雰囲気になると、問題のものを捨てるように命じ、もう一度皿占いをやらせるよう指示を出し、マライアが祈禱書を選ぶと、Miss McCloud's Reel を弾いて再び陽気な雰囲気にするよう計らい、ジョーが帰る前に歌を歌ってくれと頼むと、是非そうしてくれと口添えし、マライアがピアノの脇に立つと序奏を弾きマライアに歌い出しを合図する。特に皿占いの緊張した場面を救い、もう一度やり直させ、陽気な曲で雰囲気を作り直してから、祈禱書の意味についてマライアに話し、場を納める手際は実に世慣れており、彼女がこの家庭を取り仕切っていることは読者の目にいやが上にも明らかとなる。

しかしながら、彼女のマライアに対する応接はけっして親切なものとは言えない。そもそも招待しておいて、マライアがプラムケーキを首尾よく渡せていたとしたらどちらが供応を受けたのか分からないほど、もてなしらしきものはほとんどなされていない。特に子供が眠くなったのを契機に、早々とおひらきにしようとしているところなど、ドネリー夫人がマライアをあまり歓迎していないことが感じられる。彼女のペニー・ケーキに対するお礼の言葉の "it [is] too good of [you] to bring such a big bag of cakes" にも何となく皮肉な響きが感じられなくもない。ピアノを弾くのがご自慢でもあるらしい彼女にとってみれば、ペニー・ケーキはあまりにも貧しいお土産ということになるだろう。

あるいは、例の "break-up" があった時、もしそれがジョーの結婚と関係があるのであったら、マライアの同居を最も嫌がったのはドネリー夫人であった可能性が高い。(またこれは憶測の域を出ないが、ジョーがアルフィーとは死んでも口を利くものかと言った時にはジョーを一応たしなめてはいるものの、自分の長男にアルフィーと名をつけるほど親密な絆が兄弟間にあったことは、何もかも取り仕切りたいドネリー夫人にはあまり快適なことではなかったかもしれない。つまり、夫とアルフィーが仲違いしていることは、彼女には好都合ではあっても特に痛痒を感じることではないに違いない。)

マライアは意識の中でドネリー夫人の欠点について何１つ言葉にしていないが、ジョーが何度も(この "often" は割り引いて考える必要があるが) マライアに一緒に住まないかと言った時に、そんなことをしていたら自分が邪魔者に感じたことだろうと言い、続けて "(though Joe's wife was ever so nice with her)" と考えているところを見ると、やはりドネリー夫人がマライアを胡散臭く感じているのを意識し、しかし Dublin by Lamplight における寮母のようにしっかり者で権力を握っている夫人の不興を買えば最終的には追放されてしまうような危惧が生じるのを知って、夫人を "nice" と思い込もうとしているのだと思われる。

ジョーについては "Joe [is] a good fellow." ということと、"He [is] so different when he took any drink." という評が与えられている。この後者の、ジョーの酒癖が悪いということが、目立たぬながらも重要なモチーフになっている。マライアが来てプラムケーキの件が一段落すると、ジョーはマライアにスタウトを勧める。ドネリー夫人がポートワインもありますよと横から口を出し、マライアは特に何も飲みたいわけでないからと断るが、ジョーは "insisted" とある。それでマライアは、そんなに言うなら、ということになるのだが（この "insisted" は、皿占いの時も、子供たちがマライアを担ぎ出す際に "insisted" とあり、これも一度は断ったのだがという含みを感じさせ、マライア自身が、何もかも周囲に強要されるので仕方なくやらざるを得ないということを自分自身や周囲へのアリバイにしようとしているような用語にも見える)、読者には、ジョーがマライアを山車に使って自分が飲もうとしていることは十分に伝わってくる。そしてそこでアルコールが入ったことと、アルフィーのことについての激昂は、マライアの証言を信じれば、おそらく繋がりがあるであろう。しかし意外にも、彼は鉾先をすんなりと納めるのであるが、それは、さらに数本のスタウトをドネリー夫人に頼んでいることと関係がありそうだし、さらに穿って見れば、酒をせしめるために怒り狂って見せたという疑いもないわけでもない。まっとうなことではドネリー夫人に牛耳られるだけだから、癇癪を破裂させ（てみせ)ることが彼の唯一の自己主張を通す方法になっているのではないかと読者は疑うのである。マライアの歌に感動し、涙を一杯に溜めながらコルク抜きはどこだとドネリー夫人に聞くところでは、もうこれがどうして飲まずにいられようかという風情淋漓なのだから、おそらくはこの願望も認められたことであろう。(また縁起直しにマライアにワインを注いだ時にも、ジョーがお相伴に与っているのはまず確実である。)

こうしたジョーに対して、マライアは "Maria had never seen Joe so nice to her as he was that night" という感想を漏らす。読者から冷徹に見ると、ジョーのマライアに対する態度はそれほど親愛の情に溢れているわけではない。胡桃割りが見つからない時、ジョーは "how[do you]expect Maria to crack nuts without a nutcracker[？]" と言っているが、"nutcracker" には、「鼻の先と顎の先がひっつきそうな人」の意味があり、これがマライアを種にした "smart" remark になっているわけで、こうしたマライアを軽く笑いものにするようなところを見ても、マライアの言う "nice" を字句通り受け取るわけにはいかないであろう。マライアは、最初からこの晩が "nice" になることを想像し希望したのであるから、そういうふうに感じるように自分を誘導しているはずである。(体よく追いだされた暗い道を１人雨に濡れて帰りながら、マライアは、おそらく同じ言葉を以て、この晩を形容するに違いない。)

そのような、自分が世界を見たいように、ないし見なければならないように見ている節のあるマライアの現実認識は、「対応」のファリントンととてもよく似ている。そして、気まずいような現実が襲いかかる時、彼女の感覚は閉じ始め、耐えにくい現実をやりすごしながら、何か "nice" と呼べる事柄を探すのである。皿占いの場面で、周囲の声がちっとも彼女に聞き取れていない描写には、そのような心理防衛機構が働いているようにも読める。そうすれば彼女自身は何も知らない無垢な魂として保

全されるというわけだ。電車の中で出会った紳士は、読者には似非紳士風に感じられるものの、彼女にとっては「紳士」が酒臭い息を吐いていても紳士らしさを失わない美徳の種として認識されている。ドルシネアの男性版ということになろう。

* * * * * * * * *

マライアに魔女（witch）の面影が賦与されていることについては、多くの批評が指摘している。Hallow Eve は、妖精や魔女の跳梁する夜であるというのはよく知られた folklore であって、この晩マライアは、Dublin by Lamplight から Drumcondra まで、電車という文明の《箒》に乗って翔んでいることになる。ピカピカのボイラーは cauldron であり、体から湯気を立ち昇らせながら集まってくる女たちは鬼界の住人たちに見える。彼女たちがマグをテーブルに騒々しく打ち付けるのは、マライアの出立を祝する儀式にも見えよう。マライアが笑った時に "the tip of her nose nearly met the tip of her chin" となる異様な容貌は、本文中に 3 度同じ表現でまるで呪文のように繰り返される。茶色の雨外套に身を包んだ彼女は、電車の中ではまるで不可視の存在のようであり、電車を降りれば、白イタチのように人混みを縫って歩く。植物栽培が好きなのも、magical herbs の力を利用する魔女と通じている。

妖精の仕業か、この夜には不可解なことが起きる。マライアの買ったプラムケーキ、胡桃割り、コルク抜きが見つからなくなる。それまではなかったはずの土がマライアの皿占いの皿に盛られ、さらに、"I Dreamt that I Dwelt" の歌も、はっきりした理由もわからず繰り返して歌われ、2 番は missing になったままである。

こうした解釈の可能性について、ジョイスが意識していなかったということはまず考えられない。最初につけていた題が、"Hallow Eve" であったこともそれを裏付けている。またマライアの意識の中の子供っぽい言葉に調子を合わせるかのような、語り手の、例えば "Maria was a very, very small person indeed but she had a very long nose and a very long chin." といった文体にも、どこか fairy tale を思わせるものがある。

この視点から見たとき、マライアの皿占いはまったく別の様相を帯びる。マライアが手を宙に泳がせ、そして 1 つの皿に "descend" したところの描写の不気味さは、"Hallow Eve" の folklore の不気味さと共鳴する。選んだ土は、まるで周囲にいる人間たちの運命を予言するための儀式をにも見え、そしてそれは、mortals に対する見事な真実の予言になっているのである。マライアの笑いは、魔女の笑いと化し、人間に対する嘲りが響き渡る。"that was no play" は彼女自身の声とも聞こえる。表題の "Clay" は、定冠詞が落とされた（ジョイスの手紙を見ると、最初タイトルは "The Clay" として考えていたことが分かる）分、一層気味の悪い不定性を帯びる。(4)

"Clay" の topography については、Bruce Bidwell & Linda Heffer, *The Joycean Way* (Wolfhound Press, 1981) が最も精細な情報を与えてくれる。ジョーのモデルは、ジョイスの叔父のジョン・マレイ（John Murray）だとされ、これはジョイスの手紙などを見てもある程度確認できるようだが、そ

の彼の家がこのDrumcondra（55 St Brigid's Road Lower）にあった。そしてこの界隈は、宗教関係の施設が多いことから“Holy Land”と呼ばれており、そうなるとこれは予備知識のない読者には解読不能な仕掛けになるが、「魔女」が“Holy Land”に侵入し、そこでいろいろな“mischief”を働くという下絵があるということにもなる。Bruce Bidwell & Linda Hefferは、マライアがピラーから東のEarl Streetへ行ってケーキを買い、今度は西のHenry Streetへ行ってケーキを買っているのは、前者はダブリン有数の街娼地区に近く、後者は教会関係の施設に近いことを利用して、ジョイスが彼女の移動の軌跡が描くクロス（十字形）に、彼女の聖性と魔女性のクロスを表象させようとしているのだと解釈している。そうした解釈は、ジョイスという作家のmaniac性を考えると強ち穿ち過ぎとも言いきれないのだが、肝心なことは、どうしてそうした二面性をマライアに練り込む必要があったのかということだ。興味本位のことに過ぎないのであれば、批評家の労もジョイスの労も報われないであろう。

ジョイスの意図はいろいろに推察されようが、1つには、Halloweenの意義の歴史的な変遷ということについての意識はあったに違いない。この伝統行事は、ケルト的出自のSamhainという暦行事を源としており、そこにキリスト教が侵入してくるようになると、キリスト教会は当然これを異端視し、11月1日を全てのSaintsを記念し思い出す日とするというふうにキリスト教的にすりかえるように企て、それとともにHallow Eveが、その陰画として百鬼夜行の日となっていったとされている。

ケルト民族が邪教的な百鬼夜行の習俗を持っていたわけではないことは言うまでもないことで、Samhainは新年祭であり、夏が終わって新しい1年のサイクルが始まるその節目の祝祭である。その際、いわば生と死の相が入れ替わることから、この時期が、生と死を隔てるヴェールが最も薄くなり、あらゆる死者たちが家族のもとにより集い暖炉の前で暖を取ると信じられ、それに基づく風習が行われていたのである。キリスト教はどの「異教」に接しても、その宗教を禍々しく恐るべき色彩に塗り上げていった。知者を意味する“wicca”は、“witch”へと変貌させられ、後世の（今なお続く）おぞましい“witch hunt”の下地を準備することになる。

そういう視点で皿占いの場面を見直してみると、マライアが土に触れて周りは騒然となるが、マライアだけはなぜそんなに騒がなければならないのかわからず一人端然としているようにも見える。そうなると逆説的なことだが、知的に未成熟と思われている彼女だけが、キリスト教の撒いた子供騙しの迷信に誑かされずケルトの昔さながらに、自然に振る舞っているとも言い得るのである。

この晩、現実の死者たちこそ訪れはしないものの、“so full of pleasant talks and reminiscences”というところで、過去は蘇り、その中で死んでしまった人々の話がでてきたに違いない。そういう意味では、Samhainの伝統は、ここに細々とながらではあるが命脈を保っており、それが人々の生の意味に反映する機能を果たしている。“I Dreamt I Dwelt”の歌の、大理石のお館に住んでいたという夢は、かつてのEyreの緑なす王土の夢と重なり合ってくるようでもある。もしマライアが魔女に見えるとすれば、それはキリスト教の文化的歪曲によるのであって、マライアはケルトの血をひくごく普通の女性なのである――大体そのように、マライアが聖女か魔女かの議論は、キリスト教以前の古層

を見ることによって、収斂と意義とを与えられるように思われる。

ダブリンの人々の生を複雑化させてしまったもう１つの大きな要因がイギリスの政治的、文化的支配であることは贅言を要しないことで、『ダブリンの人々』の他の作品同様、「土」にも多くの言及がある。“A Present from Belfast” は、ベルファストがイギリスとプロテスタントの根城であることを思い起こさせ、Dublin by Lamplight は、プロテスタントの施設であり、電車の紳士は、悪くすればイギリス軍の雇われ者かも知れず、いずれにせよイギリス「紳士」の悪い模造品に見える。バルフはアイルランド人だが、プロテスタントで、結局生涯をイギリスで過ごした音楽家だ。ダブリンの通りという通りにはイギリス人の大立者の名がつけられているし、また何よりも、作品のトポグラフィーの中央に位置するピラーの頂点に君臨しているのはネルソン提督である。マライアはこうしたものに囲繞されて、いわば生を阻害されて生きる宿命であり、そのことが、ケルト的なるものを一層切ないものにしている。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

マライアは、“I Dreamt that I Dwelt” を歌うときに、１番の歌詞を２度歌ってしまうのだが、これが何故であるかは説明されておらず、この日に起こる様々な異変同様、mystery に留まる。といって、ジョイスに何らかの思い入れがなかったとするのは到底考えられないことである。通常の考えでは、マライアが緊張のあまり、それと気づかず間違えてしまったという解釈になるだろうが、想像力を逞しくすれば、かなり多くの可能性を考えることができる。その際、２番の歌詞に何か問題があったのではないかと読者が憶測するのは至極当然のことであろう。

２番の歌詞は――「私」のもとに多くの求婚者が集まり乙女心をとろかせるような愛の誓いの言葉で言い寄ってくる中、その中でもとびきりの騎士が自分を求めて進み出てくる夢を見る。その夢も甘美ではあるけれども、それよりももっと甘美な夢だったのが（１番と同じリフレインの）あなたが今でも愛してくれているという夢だった――というものだ。(5) では、この一体どこがマライアの心に強い抵抗を引き起こすのかということになるのだが、１つどうしても考慮にいれなければならないのが、結婚につながる話をされると、彼女が異常なまでの激しい含羞みの反応を示すことである。皿占いの際に、指輪を射止めた隣りの少女は “blush” するが、それは、ケーキショップで結婚という言葉を（あてつけに）投げられたマライアの “blush” と呼応している。そしてこの“ I Dreamt that I Dwelt” を歌い始める時もひどく “blush” しながら歌い始めたとある。それは歌が恋愛に関するものだからであろうが、２番の歌詞では、結婚に近接する夢が生々しく出てきて、それがマライアの耐えうる限度を超えていたということなのかもしれない。１番までであれば、結婚に直接関係のあるイメージは登場せず、普通の “blush” ですむ。

マライアは、『ダブリンの人々』の中の他の主人公たちの中ではイヴリンとの強い絆を有していて、イヴリンが駆け落ちしていこうとする波止場で急に体が動かなくなってしまったように、マライアにもどこか mental block がかかっているかのように描かれている。電車の中での「紳士」とのやりとり

とマライアの態度をよく吟味して見ると、彼女はあれ以上の関係を求めているわけではなく、自分を含羞む少女と見立て、それ以上現実が進まないことを潜在意識下で計算した上で、現実に絶望させられることを未然に防ぐために自分に適した不遇なヒロインの役割を編み出し、その繭の中に安住し、そこから決して出ていかない習癖を作り上げてしまっているように思われる。Dublin by Lamplight でリジー・フレミングが、毎年のようにマライアに同じからかいを言うのは、１つにはマライアの年不相応の、からかい甲斐のある含羞みが常に期待できるからでもあろう。その折に（客観的な語り手の言葉であると思われるが）マライアの目が "disappointed shyness" に輝いたという記述があるが、それは一体どういう意味なのだろう？含羞みは一種の媚態でもあって、女性が含羞むとそれが男性をひきつけるのだが、彼女の場合はそれがいっかな効を奏しないという意味で "disappointed" なのである、と同時に、それが彼女が自分に割り当てている一種のヒロインの感情だということでもある。（そうでなければ目が「輝く」ことはない。）電車の中での彼女の含羞みは、まさに少女のそれだが、それは決して報いられず、また報いられないことを彼女自身が先回りして取り込んでいるかに見える。（その証拠に、件の紳士は、後で思い出す時には、「灰色がかった口髭の紳士」という、もうそれほど胸をときめかすほどでもないイメージに色褪せてしまっている。）

彼女の小さな寝室で、マライアが着替えるときに鏡に自分を映す印象的な場面がある。

> ... as she stood before the mirror, she thought of how she used to dress for mass on Sunday morning when she was a young girl ; and she looked with quaint affection at the diminutive body which she had so often adorned. In spite of its years she found it a nice tidy little body.

Hallow Eve に鏡を見ると、そこに将来の結婚相手が見えるという俗信があり、ここには彼女の結婚相手は彼女自身であるという皮肉な意味も籠められていよう。若いころには大いに着飾った小さな肉体を、今彼女は「奇妙な愛情」を以て見つめている。そうした「麻痺」的な自己陶酔は「小さな雲」の Little Chandler にも感得され、彼にも含羞みの宿痾があったが、"nice tidy little body" の "nice" が、現実を霞ませる形容詞として悲しく響く。それでもここではっきりとしているのは、彼女が彼女自身にいまだ夢見ることを許しているらしいことである。

Balfe の *The Bohemian Girl* における "I Dreamt that I Dwelt" の歌にあっては、ヒロインのアーラインは、今はジプシーの群れに暮らしているが、実際は高貴で富裕な家系の娘であり、また最後には彼女の夢は叶えられるという筋立てだ。しかしマライアが自分に即してこの歌を歌えば、これは夢でしかなく、夢が叶えられる可能性は全くないだけに、原作で歌われる以上にこの歌は、夢の純粋と哀切をもって読者の心に響くのである。適齢期を過ぎて久しい年齢、矮小な肉体、異様な容貌、「未成熟」な思考の彼女には、確かにこの歌はそぐわず、ある意味では滑稽に相違ない。しかし――ここが肝心要のところだが――どの読者も、この場面で笑いはしないし、また惨たらしさも感じないのではなかろうか？

“A Present from Belfast” の財布は、そういう言葉が財布のどこかに刻んであるか縫い込んであるおそらく安手の土産物に違いないのだが、彼女はそれを大切にしている。財布を取り出すたびに、その言葉を読み、それから記憶の糸を辿って過去を思い出し、ジョーとアルフィーの世話をしていた時のことへ誘われていく。それは彼女にとっても、若さと夢のある良き日々であったかもしれない。阻害された母性が、今その代償をジョーとの過去に向かわせる。そういう少し変則的な意味で、彼女には Maria という名に通う聖母性が賦与されており、ジョーに軽く扱われてはいても、彼女のジョーに対する眼差しは母親のそれに他ならず、彼のことを心から気にかけているようだ。

涙ぐむジョーは、昔ほどいい時代はなかったと言う。それは、子供時代、子守歌にマライアがこの曲を歌ってくれたその思い出と繋がっているのだろう。そしてその思い出の中には、“best of friends” であったアルフィーもその影を浮かばせていると想像される。今は犬猿の間柄になってしまったかに見えるこの兄弟も、現実の兄弟関係がよくそうであるように、激発的な感情はむしろ隠れた愛情の裏返しの表現であって、心の底では仲を取り戻したいと願っているに相違なく、そうであれば、ジョーの涙はそのことについての自分との折り合いを示唆しているとも解釈できよう。つまりマライアはある意味で “peace-maker” としての役割を、我知らず果たしていることにもなるのである。

彼女の選んだ土は、死の不気味さを伝える一方で、それを契機に、ジョーの彼女に対する優しさは、マライアの言葉を信じれば、これまでにないほどのものになってきている。暖炉の側で昔話に花を咲かせる２人は、まるで母親と息子のようで、酒がちょっとでも入ると人が変わったようになってしまうというジョーの酒癖を考えると、何か奇跡でも働いたのかと思わせるほどだ。(無論それは、土を選んでしまったマライアに対する憐れみが、ジョーの優しさを引き出したのだと表面上は理解できようが……)

先述したように、この日は雨が降っていて、もしその土が庭から取ってきたものであるならば、その土はたっぷりと雨を含んでいたに違いない。水は皿占いにおいて、海外へ出るという切羽詰まったアイルランドの世相を反映した意味もあるが、元来は生を象徴する。そうだとすると、マライアが選んだ皿には、死のみならず生の息吹もひそやかに入り込んでいたことになる。この目立たぬ工夫が、「土」の印象を、救いのない陰惨さから救う秘められた工夫になっている。

マライアの、その顔をすぐに赤らめ、陳腐な冗談やたわいのないことにも笑い転げてしまうところには、これまで触れたように、裏を勘ぐることはいくらも可能であるが、やはり読者は彼女に、純情と含羞という真正の処女性を感知し、彼女に “quaint affection” を感じてしまうのではなかろうか。その彼女が歌う “I Dreamt that I Dwelt ”には、ひょっとすると、身分や容貌に一切関係のない、女性に本来的に備わる聖性が、不思議な作用で顕現している趣がある。そうした「現実」を巧みに写し得ているがゆえに、「土」は、短編小説の傑作の１つとして、末長く生命を保つであろうと思われる。

—— 注 ——

(1) *O.E.D.*によると、wax plant については以下の3つの種類があるが、温室で栽培していたことと、訪問客に "one or two slips" をあげていたということを考慮すると、b.の Hoya のどれかの種類である可能性が高い。a.の myrtle は「愛」の象徴を持ち、c. は "corpse-plant" とも呼ばれる気味の悪い植物であるから、その overtones はこの作品にうってつけであるが、そこまでジョイスが意識していたかどうかは分からない。

A name given to various plants either yielding a vegetable wax or having a waxy appearance; *esp*. a. the candleberry myrtle. *Myrica ceifera*; b. any species of *Hoya*, esp. *H. carnosa*; c. the corpse-plant, *Monotropa uniflora*. (*O.E.D.*)

(2) この場面には、一種精妙な epiphany の趣がある。というのは、この科白が、一方でマライアの結婚できない状況に対する負け惜しみ的な心理を暴露している（寮母に許可をもらわなければ外出できない身のどこに"independence" があり、5シリングあまりが全財産のどこに "your own money" があるのか？）と同時に、他方で女性の秘められた心理をも顕現させているからである。結婚だけを憧れとして夢見ることに慣らされ、現実には、出産と育児と家事と夫に束縛されたアイルランドの「妻」の生活に、いったいどれだけの女性が真から深い満足を持ちえたであろうか？

(3) この場面は、隣りの家から来た少女が、指輪の皿を選び当てて、顔を赤らめているのに向かいドネリー夫人が指を横に振って見せているところである。顔を赤らめているのには、少女の恥じらいとそれを裏打ちしている結婚願望が窺えるが、ドネリー夫人の *"O, I know all about it!"* という意味が籠められているという指を振る仕草はどんな意味なのだろうか？私は全部分かっているわよという中には、子供を4人も産んで育てている女性としてのいろいろな思いが存在しているように感じられはすまいか。ここは、これから結婚に向かう若い娘と、結婚の現実の一部始終を知りおえた女性との、断絶と共感の複雑な感情が交錯している印象的な場面となっている。

(4) "I have also added in the story *The Clay* the name of Maria's laundry, the *Dublin by Lamplight Laundry*: it is such a gentle way of putting it. I expect there will be no holding the Marquis of Lorne [Joyce's uncle, John Murray, the model for Joe Donnelly] whenever he sees my book." *Letters*, Vol. II, p.186.

(5)

I dreamt that suitors sought my hand,	私は夢見た、私の手を求めて訪れる求婚者たちの夢
That knights upon bended knee,	騎士たちは私の前にひざまずき、
And with vows no maiden heart could withstand,	乙女の心を溶かすような誓いの言葉で
They pledg'd their faith to me.	私への忠誠を誓う
And I dreamt that one of that noble host,	私は夢見た、彼らの一人が
Came forth my hand to claim;	私の手を求め、進み出る夢を
But I also dreamt, which charmed me most,	でも私はもう1つの夢を見た、それが一番嬉しい夢だった
That you lov'd me still the same.	それはあなたがまだ愛してくれているという夢